



Title	日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界：第3章 出稼ぎ者と帰国者への支援活動の展開と課題
Author(s)	都築, くるみ
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 21, 41-53
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22659
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_P41-53.pdf



第3章 出稼ぎ者と帰国者への支援活動の展開と課題

第1節 はじめに

日本への出稼ぎ者への日本人による支援は、出稼ぎ者の長期化に従い、各地で様々に展開されている。日本での支援の中心は教育と医療であろう。行政による小中学校での国際学級や教員の加配、取り出し授業など学校の現場でおこなわれているものの他に、NPOや各種ボランティア団体による学童保育や不登校児童生徒への対応教室、成人、子どもへの日本語教室、そして医療ボランティアなどが挙げられる。本稿では、日本でおこなわれているブラジル政府による教育支援（“エザミ・スプレチーボ；Exames supletivos”の実施）とブラジル本国のNGOによる元出稼ぎ者への就労機会提供支援（「タダイマ・プロジェクト」）について述べる。

ブラジル政府による教育支援、“エザミ・スプレチーボ；Exames supletivos”の実施は、日本滞在中のブラジル人子弟への教育の不足を補充するものとして、どのような制度や援助が必要であるかをブラジル政府が認識していることを示している。また元出稼ぎ者への支援の内容を見ると、元出稼ぎ者がブラジルにおいては莫大な額となる貯金を手元に帰国しても、なお直面し、解決できない問題に、いかなる支援を与えたらよいかを示している。すなわち、元出稼ぎ者のブラジル社会についての認識の不足が、失業の事態打開を阻害していることを示している。

この二つの取り組みの紹介は、一見異なった局面の異なった事態について、行政とNGOという異なった支援主体が、不連続におこなっていることの羅列に見えるかもしれない。しかし、深く洞察すると、その共通性が明らかになる。第一に、出稼ぎ者の子弟への教育は、①日本の制度による教育や②その不足、不適応を補うNGOの支援でまかなわれるものではなく、また③日本にあるブラジル学校でも充足できるとは言えない。そこで、ブラジルの資格をブラジル政府直属の組織が与える機会を自ら作ることにより、就労目的の出稼ぎ者の子弟に、日本での学習の目的を与えると同時に、「ブラジルでの将来」の期待を持たせ続けることができる。第二に、ブラジルにおけるNGOの支援も、金銭では解決できないブラジル社会での定位置を占めるための支援、すなわち「ブラジルでの将来」を切り開くための支援であるということである。

以下で、第2節「日本で実施されている教育課程検定試験：“エザミ・スプレチーボ；Exames supletivos”の実施状況と今後の課題」においては、試験実施の内容とその意図を述べる。第3節「元出稼ぎ者を支援する『タダイマ・プロジェクト』」では、日系人篤志家が自らの財産を寄付しておこなっている、元出稼ぎ者に対するブラジル社会に再適応するための行動と、求職支援について述べる。

第2節 日本で実施されている教育課程検定試験：

“エザミ・スプレチーボ（Exames supletivos）”の実施状況と今後の課題

日本にいるブラジル人の子弟に対する教育については、ブラジル政府もその重要性をよく承知しているようである。日本における検定試験：“エザミ・スプレチーボ（Exames supletivos）”は日本に滞在するブラジル人の間に徐々に浸透し、受験者数も増加している。この試験について、パラ

ナ州教育委員会のインタビュー記事と資料をもとに、以下に述べる。

第1項 試験の概要

この“エザミ・スプレチーゴ (Exames supletivos)”は、ブラジル本国においておこなっている教育課程の実力を修めているかどうかを、日本で認定するための試験である。ブラジルの教育制度は日本とは異なる。以下で簡単に述べる。すなわち、①義務教育以前の前課程として保育園、幼稚園 (年限自由)、②義務教育制の初等教育 (7～14歳までの8年間) と、③義務教育制ではない中等教育 (15歳から3～4年間)、④短大・大学教育 (大学の学部によって異なるが18歳からの2～6年間)、⑤修士課程及び博士課程 (2年間以上) である。日本でおこなっているのは、この②第二課程の初等教育課程修了試験と③第三課程である中等教育課程修了試験である。日本の感覚で言えば、義務教育修了程度と高校卒業程度ということになるであろう。以下では、「初等教育」 (“Ensino Fundamental” = 義務教育修了程度)、「中等教育」 (“Ensino Medio” = 高校卒業程度)、また試験全体を言うときには「検定試験」という用語を使用して述べることにする。

表1 ブラジルの教育制度

過程	呼称	一般総称	年限	条件
前課程	Pre-Primario	保育園、幼稚園	年限自由	
第一課程	Primerio Grau	小学校、中学校	最低8年	原則7歳から
第二課程	Segundo Grau	高校、専門学校	3～4年	原則15歳から
第三課程	Superior	短大、大学	2～6年	原則18歳から
第四課程	Pos-Graduecao	修士、博士課程	2年以上	

出典：<http://www.ovta.or.jp/info/america/brazil/oldhrddb/bra-h004.html>

さて、この試験は日本にいるブラジル国籍者に、ブラジル教育制度に基づいた①初等教育修了程度と、②中等教育修了程度の検定試験を日本でもおこなうというものである。1999年から始まり、既に7年が経過している。

受験資格は、①年齢制限があることと、②身分証明書を提示することができることの2点である。詳しく述べると、①この検定試験の制度はすべてブラジルの教育省が把握している全国レベルの法律や制度に従わなくてはならない。この試験を受ける資格は、初等教育検定試験では必ず15歳以上であること、中等教育検定試験では、必ず18歳以上であることである。正式な統計資料の蓄積はこれまでないが、初等教育検定試験を受ける人の8割は大人で、30歳台以上である。中等教育検定試験を受ける人は、若い人が多いとのことである。なぜこういう現象が出るのかは、後述する。②身分証明書を提示できることを求めるのは、パスポートないしブラジル国内のIDを所持していることなどにより、正規滞在者であることを証明することが求められているからである。

第2項 実施にいたる経過

日本にいる子どもたちの義務教育関連の対策については、ブラジルの教育省 (ブラジリア) が管轄している。しかし、検定試験の実務は、パラナ州で担当している。当初、CNE (ブラジル教育省の中のNational Council of Education) が企画した時、ブラジル全土に呼びかけて、試験を担当してくれる州を探した (国は試験を受けたい受験者に、試験を与える権利がない)。これに立候補したのがパラナ州教育委員会 (クリチーバ市) だけであった。パラナ州教育委員会が、ブラジリアのCNEの職員と日本へ視察に行き企画書を作成して、国に提案したことにより実施が実現された。

これは従来無かった画期的な試みである。しかも海外に移民している中でも日本にしかこの制度は設けられていない。現在、7年を経過し、その成果が良好なことからアメリカやスイスでも実施を希望する声が増したが、アメリカは広すぎるという理由で実施は困難ということである。この企画は、ブラジルが政府レベルで日本への出稼ぎの教育問題の重要性を対策として最重要視しているからであると、駐日ブラジル大使館の人たちは認識しているということである。

試験はブラジル人の集住している群馬県、神奈川県、静岡県、三重県（当初は愛知県で実施。2004年から三重県に変更）の4か所で実施されている。試験は、初等教育検定試験（“Ensino Fundamental”）は土曜日に、中等教育検定試験（“Ensino Medio”）は日曜日におこなっている。同じ人が土曜日と日曜日に受験したり、親子で受験したりしている人もいるようである。

第3項 実施の状況

【試験の範囲】

試験は、科目ではなく知識分野（エリア）で行う。エリアは、①言語（ポルトガル語、ブラジル文学、英語）、体育、芸術、②ヒューマン・サイエンスとそのテクノロジー（歴史、地理）、③数学及びそのテクノロジー、④ナチュラル・サイエンス及びそのテクノロジー（物理、科学、生物学）である。試験は、一度に全エリアを受験する必要は無い。従って、下記の受験者数は「延べ人数」ではなく、「受験人数」である（一人で4エリア受ける人も居るし、1エリアだけの人もいる）。合格の有効期限は無期限である。合格基準は10点満点中6点以上を取らなければならない。5時間で80問答える。（実際の資料によると、中等教育検定試験では、1エリアで25問×4エリア=100問）。ブラジル国内での試験は科目別であるところが最大の違いである。

【費用】

試験の実施には莫大な費用が必要である。毎年この時期になるとブラジルから関係部署のスタッフが来日し、この試験を実施していく。従って、スタッフの海外渡航費用、ホテル代、交通費、会場費も必要である。この試験は実質的には無料で受験できることもあり、全体での費用は10万ドル必要である。受験者が無料で受験できる試験を、政府レベルでおこなっている点がこの検定試験の大きな特徴であろう。

第4項 日本における“エザミ・スプレチーボ”実施の変化

“エザミ・スプレチーボ”が1999年から実施されて7年を経過し、様々な点で変更がされた。1999年から2003年までと、2004年以降に変化があったので以下で述べる。①試験範囲について：まず申し込みは、当初、学科ごとにおこなっていたが、2004年からはエリアごとに申し込みをおこなうようになった。②身分証明書の提示について：2003年までは、身分証明書を提示して受験した。2004年以降は、試験当日にパスポート、ID、身分証明書などをコピーしたものなど、試験を受ける時期に正式な在留資格があることの証明書を提出することが義務化された。（本部は、試験実施後、それらをブラジルに持ち帰る。これは証明書を発行する時に、より確実なデータが得られるからである）。③申し込み料について：また当初は、申し込み料が必要であったが、これが無料となった。全ての費用をブラジル教育省で負担している。すなわち2003年以前は、教材費として5,000円支払い、この試験に使う教材を購入させていた。今ではインターネットで、教材にアクセスでき、各自ダウンロードして勉強できるようになったので無料となった。④試験場について：試験場は当初、群馬県、神奈川県、静岡県、愛知県の4県であったが、2004年以降、群馬県、神奈川県、静岡

県、三重県に変更された。(1999年～2002年は名古屋市、2003年は豊田市、2004年からは三重県鈴鹿市で実施されている)。愛知県から三重県への変更は、試験会場の都合である。

試験が実施される場所は、日本の地理が不案内なブラジル人であること、また遠方から家族連れ、友人連れでやってくる人たちが多いために、分かりやすい場所であること(公共的な場所や学校など)、車で来る人が多いために駐車場が広いことなどを考慮して決められているようである。ちなみに、群馬県では関東学園大学、神奈川県では横浜のJICAのセンター、静岡県では「研修交流センター」、そして愛知・三重県方面では、当初、南山短期大学、名古屋市立大学、愛知学院大学(以上、名古屋市)、豊田工業高等専門学校(豊田市)、そして2004年から三重県の鈴鹿のブラジル人学校(“ESCOLA ALEGRIA DE SABER-UNIDADE DE SUZUKA”)である。

第5項 受験者数と登録者数の変遷

以下に、この試験の受験者数、登録者数(=合格者数。受験に合格し、書類に登録された)の変遷を述べる。

【受験者数】

①初等教育検定試験受験者数は、1999年当初1,715人であったが、2000年には一挙に4,053人と増え、2001年には6,158人にもなった。2002年には3,972人、2003年には3,583人と横ばいとなった。2004年には1,914人と下降した。②初等教育検定試験の合格率は、17.0%(1999年)、18.0%(2000年)、18.4%(2001年)などと低かったが、2002年に27.6%となり、2004年には52.7%と上昇している(表2、図1)。③中等教育検定試験の受験者数は、1999年に3,798人、2000年に8,496人、2001年に12,759人、2002年には7,523人、2003年に10,228人、2004年には4,121人と増減がある。④合格率は当初13.0%(1999年)、13.8%(2000年)、13.8%(2001年)と低かった。しかし2002年に28.1%と上昇し、やはり2004年には53.7%と上昇している(表3、図2)。⑤初等教育、中等教育試験いずれも2004年になって合格率が50%をこえるようになった。

【登録者数】

地域別の登録者全体の推移としては、①初等教育検定試験の方では、実施された多くの地域において、1999年から2001年、2002年と徐々に増加した。2003年でいったん下降するが、2004年に再び上昇している(表4、図3)。中等教育検定試験でも、2002年までに徐々に増加している。②初等教育、中等教育検定試験ともに、愛知・三重県実施地域、次に静岡県での登録者が多い(表5、図4)。2004年での改革が登録者数に大きな影響を与えたといえる。

< “エザミ・スプレチーボ(Examessupletivos)” 登録者推移 >

表2 初等教育検定試験受験者数と登録者数

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
受験者数	1,715	4,053	6,158	3,972	3,583	1,914
登録者数	292	731	1,133	1,098	693	1,009
合格率	17.0%	18.0%	18.4%	27.6%	19.3%	52.7%

図1 初等教育検定試験受験者数と登録者数（表2に対応）

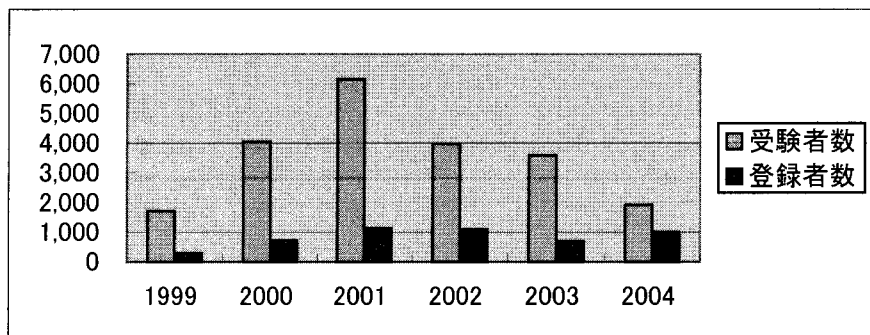


表3 中等教育検定試験受験者数と登録者数

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
受験者数	3,798	8,496	12,759	7,523	10,228	4,121
登録者数	493	1,173	1,756	2,112	1,546	2,215
合格率	13.0%	13.8%	13.8%	28.1%	15.1%	53.7%

図2 中等教育検定試験受験者数と登録者数（表3に対応）

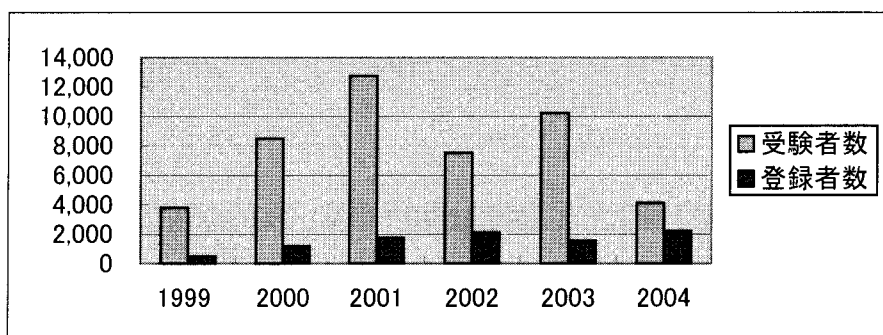


表4 初等教育検定試験登録者数年度別推移

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
群馬	46	100	217	245	149	286
愛知・三重	135	307	576	532	314	291
静岡	59	158	229	234	175	358
神奈川	52	166	111	87	55	74
合計	292	731	1,133	1,098	693	1,009 ※1
受験者数(人)	1,715	4,053	6,158	3,972	3,583	1,914

図3 初等教育検定試験登録者数年度別推移 (表4に対応)

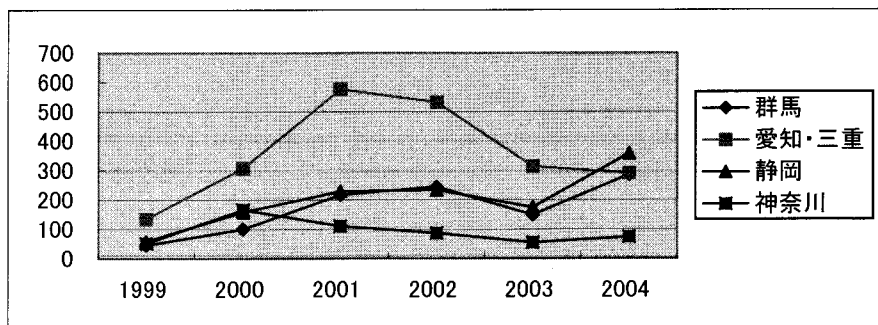


表5 中等教育検定試験登録者数年度別推移

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
群馬	90	170	293	359	319	432
愛知・三重	176	551	936	1,062	713	777
静岡	103	215	298	409	333	769
神奈川	129	237	229	282	181	237
合計	498	1,173	1,756	2,112	1,546	2,215
受験者数(人)	3,798	8,496	12,759	7,523	10,228	4,121

※2

図4 中等教育検定試験登録者数年度別推移 (表5に対応)

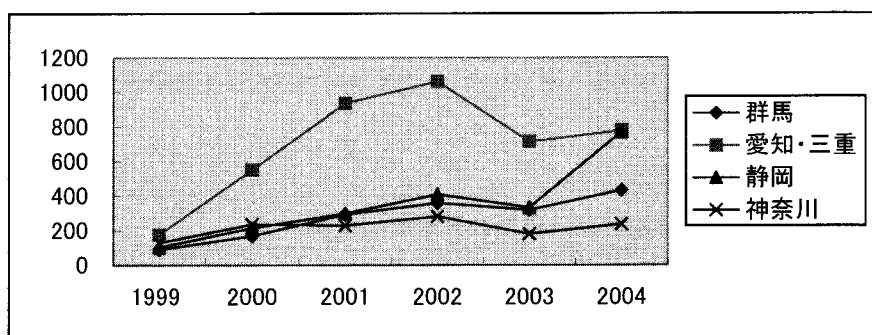


表6 登録者数総計 (※1) + (※2)

年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004
総計(人)	790	1,904	2,889	3,210	2,239	3,224

第6項 検定試験の浸透の理由と若干の考察

検定試験の実施への取り組みは、ブラジル人の中に浸透してきているようである。その理由は、①メディア（インターネット、新聞）を有効に使用していることが多大に貢献しているようである。試験の実施、試験問題、試験場の実施場所など、時期が近づくとアナウンスされている。また実施後、検定試験に合格し、「登録者」となった人についても、インターネットに掲載され、自分の結果を知ることができる。②検定試験が無料であることも大きい。③合格後、「登録」されたエリアについては、全エリアで合格するまでチャレンジすることができる。何年もかけてチャレンジすることができることは大きい。これについて少し述べると、母国を離れて、自分のアイデンティティの保持のため、大人になってからチャレンジする人もいる。日系ブラジル人が来日し始めた当初（1980年代前半）は、比較的高学歴の人の来日が多かったが、入管法改正後、比較的低学歴の人が多くなった。彼らの中には、高校卒業直後あるいは高校中退で来た人、また親に連れられ小学校の途中や就学以前に来日した人も多い。そうしたブラジル人たちにとって、「いつか帰国する」という「希望」の実現のためや「安全弁」としての検定試験受検は、大きな心の支えとなっているのかもしれない。また日本で成長し日本の学校教育を受けたり、通信教育でブラジルの教育課程を修了した少年たちが中等教育検定試験を受検する傾向もある。従って、初等教育検定試験に年長者が多く、中等教育検定試験の受験者に若者が多いのである。

さて、最後に、ブラジル政府が、この試験を実施することの最大の目的は次のようなことである。すなわち、日本に滞在するブラジル人が、検定試験を受けることを目的にする生活を送ることにより、日常的な目標を遊びや犯罪に向かわせないためである。そして「いずれブラジルに帰国する」という夢の実現のための第一歩として、自己の能力を向上させ、日本での滞在や就労年数を「向上心を持って生活した」というプライドやアイデンティティを保持させるためでもある。日本からブラジルへ送金される莫大な金額に応える政府の姿勢であり、またその資金があつてこそその対応とも言えよう。

さて、この試験実施の今後の課題であるが、第一に、このエリアごとの試験内容がブラジル本国での実施のものより容易である点を指摘する向きもあり、資格があつても実力が伴わないのではないかという危惧があることである。第二に、この試験の登録者がそのままブラジルでのより高次の教育課程への進学と結びつくか、である。次に述べる「タダイマ・プロジェクト」のスタッフの発言によると、日本への出稼ぎ者のブラジル帰国後の再就職は大変厳しいものがある。出稼ぎ前のブラジルでの社会において、その学歴や専門技術は、退職時点で既にあまり有効ではなく、まして十年近い日本での出稼ぎ生活後には、より厳しい条件となっている。元出稼ぎ者がブラジル社会で通用するには、より高い学歴や専門技術が必須となる。この現実に対して、この“エザミ・スプレチーボ（Exames supletivos）”での資格取得はどこまで応えられるのか、である。

第3節 元出稼ぎ者を支援する「タダイマ・プロジェクト」

第1項 プロジェクトの目的

「タダイマ・プロジェクト」は、元出稼ぎ日系人に対する援助活動である。活動の中心となるのは、日系人の島袋レダさん（日系グループ慈善促進協会会長・「タダイマ・プロジェクト」主宰者）と、ハニウ・マルコスさん（「タダイマ・プロジェクト」担当者）である。サンパウロ市のリベ

ルタージ商工会議所¹⁾の一室を借り、援助事務をおこなっている。

「タダイマ・プロジェクト」の活動の目的は、ハニユウさんによれば①「Employability」と②「Update, Improvement」であり、そのための支援をすることである。支援対象者は一般ブラジル人にも及び、活動は、最初は全体へのレクチャーをし、その後元出稼ぎ者だけを別に一室に集めて、そこから「タダイマ・プロジェクト」となる。最終的には自己のモチベーションや能力を高め、再就職を支援することである。

第2項 「タダイマ・プロジェクト」立ち上げの経緯

このプロジェクトは、日系人女性の島袋レダさんたちが、日系人社会に関しての様々な心配や不満を感じ、それらについての話し合いをしようということになり、島袋さんが34人の日系人を集めて、1999年10月に初会合をおこなったことに始まる。その時点での日系人社会の問題は、老人問題、失業者の問題などがあり、その根本はお金の問題であるということになった。従って、このグループの最初のアクションは、失業者のサポートをしようということに決まったが、この時点で日系人だけを支援するということになる、人種差別であるとブラジル社会からみなされるリスクがあったので、一般のブラジル人の失業者にも支援をしようということになった。しかし、問題の本質は、ブラジルに帰国した元出稼ぎの人たちへの支援である。

活動を始めて約5年半経過するが、実際に仕事が見つかった人たちは約1,200人であるという。これらの費用のすべて（印刷、電話代、社員の人件費、コンピュータなど施設費）を島袋さんが負担してきた。島袋さんたちは2004年12月に正式にNGOを作り、正式の社員2名が常駐し、そこに複数のボランティアグループが参加している。今後は企業や個人の支援で一つの基金をつくって、その基金を利用して、この活動を生かして行なうつもりとのことである。

第3項 プロジェクトの活動方法

「タダイマ・プロジェクト」は「日系グループ慈善促進協会」の活動の一部である。現在、月に1回、最終木曜日の夜6時半からリベルダージ商工会議所で、会を開催する。1回に250人くらい集まるが、その中で約70%が日系、非日系を含めた一般の失業者、そして約30%が元出稼ぎの人たちである²⁾。1時間半位のスピーチをハニユウさんがおこなう。そのスピーチの内容は二つに分かれており、第一部は就職活動に関して一般的なレクチャーをする。これは全体の参加者に対しておこなう。次に、第二部は元出稼ぎ者の日系人だけを別室に分けて、モチベーションに関して40分くらい話す。第二部から「タダイマ・プロジェクト」の始まりである。それが終了後に30名位のボランティアが面接をする。

一連の活動は以下の手順でおこなわれる。①このレクチャーに参加する以前に、失業者は、リベルダージ商工会議所にある事務所へ出向き、履歴と希望職種を登録する。②事務所では、平日に社員（2人）が常駐し、失業者の履歴やデータを登録したりする。③その後、ボランティアのグループが各失業者に、「最後の木曜日にこのようなレクチャーがありますので来て下さい」と電話をする。ボランティアが電話をするのは100人程度であるが、その電話を受けた人が友人、父親、親戚などに声をかけ、250人くらい来てしまう。④木曜日にハニユウさんが第一部のスピーチをする。スピーチをしている間に、別のボランティアグループが、参加者が持参した履歴書と希望を読み、就職先をマッチングする。就職先企業として常に300社のオープンポジションのデータベースを用意してある。⑤このあと一般のブラジル人は、マッチングされた企業に就職するかどうかを、30名

のボランティアが約15～20分の面接をする³⁾。合格をすると紹介状を書き、サインをして、参加者は仕事先にそれを持って行く。⑥このデータベースは月に2回、更新している。⑦実際にこの5年半で仕事が見つかった人たちは約1,200人であるが、仕事が見つかって、時々連絡がこないケースもある⁴⁾。⑤の段階で、日系人の元出稼ぎ者は別の部屋へ分けられ、そこから「タダイマ・プロジェクト」が始まる。⑧「タダイマ・プロジェクト」も、2つのステップに分かれている。第一段階の元出稼ぎ者へのレクチャーでは、自己啓発的なレクチャーを受ける。ここでは出稼ぎから帰った人たち専用のスピーチが行われ、約30人～50人位の人たちがその専用のスピーチに参加する⁵⁾。⑨第二段階目は、最初のレクチャーの2週間後に他のミーティングをおこなう⁶⁾。そこに前回出席者の半分位が再度参加する。そこでは、人数も少なくなっているため、より個人的な話が出る。そこでグループごとに各元出稼ぎ者が自分の悩みや苦しい心情などを話し、相互に問題を話しあったり、情報交換などをして交流を深め、今後のブラジルでの生活のことを共に話し合い考えながら、ブラジルでの生活を歩んでいくという方法である。

この「タダイマ・プロジェクト」の第一段階が、プロジェクトの目的である①「Employability」の提示であり、第二段階が②「Update, Improvement」を目的としている。第一段階では、出稼ぎから帰ってきて、ブラジルで就職したい人たちに、ブラジルで就職するのに必要な能力や資格の最低条件を示す。そしてブラジルで仕事をする目的であれば、勉強しなければならないポイントを示し指導する。次に第二段階で多くの出稼ぎの方たちが抱えてきた心理学的な問題や気持ちの落ち込みをミーティングによって相互に話し合わせて、癒し、モチベーションを上げることである。

第4項 元出稼ぎ者のブラジルにおける問題点

元出稼ぎ者がブラジルで就労する場合、多くの問題点がある。第一には経済的な問題がある。例えば、ブラジルでリストラにあい、日本に出稼ぎに行くことを決心する。ブラジルでは決して就労しないような工場労働に従事し、大金を持って帰国する。ところがブラジルでは就労する仕事がない。持ってきた大金も日々の生活で失ってしまったりする。ブラジルでも、日本で従事していた工場労働ならあるがそれはプライドも許さないし⁷⁾、ブラジルでは日本ほどの給料がもらえない。そして「同じ工場労働をするのなら、日本でしたほうが良い」と再度日本へ向かうことになる。あるいは起業をしようとしていたパートナーにお金を持ち逃げされたり、企業経営のノウハウを知らず、大金を失ってしまうケースも頻繁に耳にする⁸⁾。つまり出稼ぎの結果の大金をうまく生かすきれない人が多い。

第二の心理的な問題は出稼ぎに行く時点からある。①まず、出稼ぎに行く時点で、「大変うれしい」という気持ちで行く人は少ないという。どちらかというと「やむを得ない」「恥ずかしい」「(家族や友人と別れて行く、妻子を置いて行くのが) 悲しい」である。帰国後は、それらに加えて「(日本に行って日本語ができないから、いくら怒られて不平等なことがあっても文句が言えない等で) 悔しかった」が加わっているという。②更に加えて、自分の人生の目的が出稼ぎに行く前には少なくとも「お金を稼ごう」という目的があったが、帰国後には「道を見失っている」という点がある、ということである。③また出稼ぎ者同士の中で、差別構造意識が構築されている場合もあるそうである⁹⁾。

第三に日系人社会の元出稼ぎ者の受け入れの意識がある。多くの元出稼ぎ者は「ただいま」と言っ

でも」は続かない。「二、三ヶ月後にはまた一人になる。」(島袋さんの言葉)。元出稼ぎ者は、大金を持って帰国するが仕事は無く、彼らの貯金は生活のために消えて行く。元出稼ぎ者には「貯金通帳にお金はあるが、それを増やすことはできず」、「仕事は無く、将来性もない」。島袋さんは「ブラジルのコミュニティリーダーの方たちが、もっともっと指導の形で出稼ぎへ行く方たち、戻ってくる方たちをサポートすべきではないか」と考える。この意識が島袋さんの活動の源泉となっている¹⁰⁾。

第5項 「タダイマ・プロジェクト」が求める「Employability」

「タダイマ・プロジェクト」が元出稼ぎ者に求める「就職できる条件」は大変厳しい。ハニウさんの説明によると、元出稼ぎ者に共通しているのは、第一に日本で就労していた数年間にあまり能力を必要としない仕事に就いていたので、その期間新しいスキルを覚えることができなかつたこと。第二にもととの教育の問題がある、という指摘である。日本語も、情報システムも勉強しないで帰国してくる。またもともと標準語のポルトガル語も話せない、他の語学も勉強していない、という状態である。従って、ブラジルの会社では使いたくても使えない人材であると。そこで、ハニウさんたちは「勉強する必要性」を認識させたいと考える。彼らが求めるのは、「ブラジルで働きなければ、短大でも、専門学校でも良いから勉強しなさい。」「ITを勉強しなさい。」「日本語を勉強しなさい」「資格を取りなさい」ということである。

日本へ出稼ぎに行く人は、中等教育を修了した時点で行く人が多く、大学卒業をしている人は一部とのことである¹¹⁾。しかし、日本で言う高校卒業程度で日本の工場働いて、帰国した場合、一般のブラジル企業は採用しないという。それは教育の問題であるという。ブラジルの一般企業は中等教育のみでは、雇用は難しい。工場での採用はあるが、日本で工場労働する場合の三分の一程度の収入にしかならないので、元出稼ぎ者は工場労働に就労したがらない。しかし現実には、元出稼ぎ者は現在のブラジル企業が求める能力の条件を持っていないことになかなか気づかない。それを提示し気づかせるのが、このプロジェクトの目的でもある。

また、実際に出稼ぎ資金を元手に起業を計画する人もいるが、それに対する支援はこのプロジェクトの目的ではない。

第6項 元出稼ぎ者とブラジル社会

日本へ出稼ぎに来て、数年の就労の後ブラジルに帰国した元出稼ぎ者にとって、最大の問題は、ブラジルでの仕事がない、ということであろう。しかし実はそれは出稼ぎに行く前から明らかなことであつた。10数年前、出稼ぎ者の第一陣は、祖父母や両親から話だけ聞いていた日本へ、大変な覚悟でやってきた。彼らは、計画的な就労と明確な貯蓄目標とその達成期間、帰国後の人生設計を持っていた。第二陣は、第一陣の話聞き、「やや安心して」来日した。入管法改定後は、雪崩をうったような来日が続いた。彼らに「明確な目標や動機」と「就労計画」はあつたのだろうか。出稼ぎはブラジル社会での職業を確保することができなかつた成人や、高校卒業したての若者の安易な「オプション」ではなかつたのか。学齢期に達している子どもたちを安易に同道してきたのではなかつたのか。自分も含め、子どもたちに「いずれはブラジルに帰る」ことを前提にしつつ、明確に期限を切った生活をしてきたのだろうか。子どもたちにブラジル社会で役に立つ学歴や実力をつけておくことに努力したのであろうか。

これらの計画性と実行力を持たずに来日した第二陣以降の日系人たちは、就労現場で高度なスキ

ルを習得することもできず、帰国したのであろう。もし、出稼ぎ中に日本語を習得していれば、それがブラジル社会では新たな技術となったであろう。また、出稼ぎ者の中には、日本語を習得したことによって、同じ出稼ぎ者を対象としたエスニックビジネスを成功させた人や、日本で見た「ブラジルにないビジネス」を思いつき、ブラジルで実行し成功した人もいる。「タダイマ・プロジェクト」が日系人に求める要求は大変高い。しかし、このプロジェクトを通して自らの置かれた立場に気がついた人が、一度は離れたブラジル社会に再適応し、就労機会を得ることができるのであろう。

最後に、民間のボランティア組織がその主催者の経済的背景を頼りに、この約5年半で活動してきた内容は、日系人社会の受け皿として多大な意義がある。しかし、本来は元出稼ぎ者はもちろん現在出稼ぎ中の人々も、自分や子どもの将来設計を明確に立て、戦略的な努力が必要であろう。計画性のない結果としての日本定住や、「いずれ帰るから」という安易な問題解決の思考回路は人生を無駄にする可能性が高い。口先ではない「ブラジルでの明るい将来」を見据えて、努力をすることが望まれるのではないだろうか。

注

- 1) 「リベルタージ」とは、サンパウロ市にある「東洋人街」をさす。日本人移民当初は、「日本人街」と呼ばれたが、現在は韓国、中国系の人々の進出が著しいので、「東洋人街」と呼ばれている。
- 2) 1999年10月6日～2005年8月18日までに、このプロジェクトが対応した応募者総数7,914人のうち、①日系人は4,474人(約56.5%)、非日系人は3,440人(約43.5%)、②元出稼ぎ者は2,027人(25.6%)、非出稼ぎ者は5,549人(70.1%)、不明338人(4.3%)である。
- 3) 注2と同様の調査で総数7,914人のうち、この面接を受けた人は、7,129人(98%)、受けなかった人は785人(10%)である。多くの人数が面接を受け、真剣さが感じられる。
- 4) 同じく1999年10月～2005年8月の間に、就職した人977人、再就職した人184人、合計1,161人である。1,161人のうち、このプロジェクトの第1年目(1999年10月6日～2000年10月5日)に就職した人は108人、第2年目(2000年10月6日～2001年10月5日)では184人、第3年目(2001年10月6日～2002年10月5日)に就職した人は225人、第4年目(2002年10月6日～2003年10月5日)には187人、第5年目(2003年10月6日～2004年10月5日)には229人、第6年目(2004年10月6日～2005年8月18日現在)は228人である。成果は徐々に増加していることが明らかである。
- 5) 当日のレクチャーに参加したアンジェロ・イシによれば(2005.8.25(木)参加)、「前半の一般人への『就職活動のアドバイス』に関する講演は、日系人よりも非日系人(一般のブラジル人)の求職者が熱心に話を聞いていました。ハニエウさんはなかなかユーモラスかつ饒舌に、就職活動の基本を説明していました。例えば、『履歴書は数十通単位ではなく、数百枚単位で送れ』、『面接の日は時間に余裕をもって出かけなさい』とか。「デカセギ帰りの求職者に特化した『タダイマ・プロジェクト』の指導風景」では「別の日系ブラジル人が、より自己啓発的な匂いが漂う講演をしました。『日本での仕事や生活を経験したことのメリットやデメリット』を出席者に語らせたり、『明確な人生設計を持たなければならない』というアドバイスを交えたり」してい

たという。

- 6) ハニュウさんによれば「一時間のミーティングで一回のレクチャーをやっても、あと三日、四日後にはその多分90%くらい忘れてる。ですから二週間後にもう一回話しをして、モチベーションの面をこちらでサポートやアドバイスします。」とのことである。
- 7) ハニュウさんによれば、ブラジルでリストラされた時点で、彼らの持っているスキルではブラジル社会ではすでに就労できないのであるから、出稼ぎ後、その同じスキルのままでブラジルに帰国しても良い就労場所が無いのは当然といえば当然である。しかしその間にブラジルに残った親族や友人たちは、かつての自分より「良いポジション」に就いていたりすると、「恥ずかしい」という気持ちになるようである。
- 8) 事業をしてだまされたり、パートナーにだまされた、社員にだまされた、事業に失敗した、事業をするだけの準備や能力が無かったのに、事業をするらしいと聞いて近づいてきた人にだまされた、など枚挙に暇がない。
- 9) ハニュウさんによれば、「自分は東京で働いていた、地方の工場労働ではなかった」「自分は大企業で働いていた。あなたはパーツを作る下請け会社で働いていたのでしょう。」「自分は東京のレストランで働いていた。私はブラジルの大使館の方たちやブラジル銀行の社員たちを相手に仕事をしていました」など、様々な些細なことで差別化をして、それをプライドとして持ち言説化している元出稼ぎ者がいるという。
- 10) この第三番目の問題を解決すべく、島袋さんたち「タダイマ・プロジェクト」が「お帰り」と言って具体的なサポートをすることである。このプロジェクトの現在の最大の問題点は経済的な問題であり、これまで島袋さんの個人的な寄付によっている。NGOを設立したので今後は基金を作って、このプロジェクトや日系人グループを生かしてゆくことが課題である。
- 11) 元出稼ぎ者たちの学歴については、「タダイマ・プロジェクト」に応募してきた人たち（1999年10月6日～2005年8月18日）の統計（注2と同じ統計）から推計することができる。（1）元出稼ぎ者で既に就職した人たちの統計（表7の（1））と、（2）元出稼ぎ者で、現在まだ失業中で、「タダイマ・プロジェクト」に応募している人たち（表7（2））の属性を見ると、学歴状況はいずれも「中等教育卒業生」（35.4%）と「短大・大学卒業生」（24.1%）、「短大・大学中退生」（23.6%）が高い割合を占めており、全体で83.1%を占めている。「大学を卒業している人は一部」というが、この統計によると、「大学・短大卒業生」が24.1%を占めており、このプロジェクトに参加している人は、筆者がこれまで調査している経験から実感しているより、多少高い気がする。

また、年齢についてみると（表8）、（3）失業者全体では、①「21～30歳台」（37.3%）、②「20歳台以下」（20.4%）、③「31～40歳台」（20.1%）の順であり、合計77.8%を占める。（4）元出稼ぎ者で現在就職した人に限って言えば、①「21～30歳台」（45.1%）、②「31～40歳台」（26.9%）で72%を占める。（5）元出稼ぎ者で、現在もおお失業中の人に限って言えば、やはり①「21～30歳台」（35.9%）、②「31～40歳台」（31.2%）で67.1%を占める。これらから、「21～30歳台」「31～40歳台」を中心とした、「中等教育卒業」から「短大・大学卒業」の間の学歴を持つ若い世代が、ブラジルでの就職、再就職を求めているということである。日本でのブラジル人の集住地では、4世の若い世代が出産、育児をしており、保育園などは盛況であるが、それにもか

かわらず、ブラジルへの帰国者にも多くの若い元出稼ぎ者がおり、求職していることが明らかになった。

表7 学歴状況

	(1) 就職者		(2) 失業中の応募者	
	人数	%	人数	%
初等教育中退	17	4.4%	22	3.7%
初等教育卒業	18	4.6%	28	4.7%
中等教育中退	31	7.9%	55	9.3%
中等教育卒業	138	35.4%	185	31.2%
短大・大学中退	92	23.6%	147	24.8%
短大・大学卒業	94	24.1%	147	24.8%
不明	0	0.0%	9	1.5%
合計	390	100.0%	593	100.0%

表8 年齢

	(3) 失業中の 応募者		(4) 元出稼ぎ者 就職者		(5) 元出稼ぎ者 失業中の応募者	
	人数	%	人数	%	人数	%
20歳以下	499	20.4%	13	3.3%	31	5.2%
21～30歳	913	37.3%	176	45.1%	213	35.9%
31～40歳	493	20.1%	105	26.9%	185	31.2%
41～50歳	314	12.8%	41	10.5%	80	13.5%
51～60歳	184	7.5%	38	9.7%	58	9.8%
61～70歳	40	1.6%	16	4.1%	23	3.9%
71～90歳	5	0.2%	1	0.3%	2	0.3%
不明	3	0.1%	0	0.0%	1	0.2%
合計	2,451	100.0%	390	100.0%	593	100.0%

(表7、表8 共に、「タダイマ・プロジェクト」資料より作成)

(都築くるみ)